# 伊藤整全集

第十三巻

# 伊藤整全集

13

新潮社版

編纂
瀬沼茂樹
平野　謙
小田切　進
奥野健男

新心理主義文学　他
定価二〇〇〇円
昭和四十八年十二月十日　印刷
昭和四十八年十二月十五日　発行
著者　伊藤　整
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一　電話
東京二六〇―一一一一　郵便番
号一六二　振替東京八〇八
印刷所　株式会社精興社
製本所　株式会社大進堂

伊藤整全集
―13―

© Sadako Itō
1973. Printed
in Japan.

乱丁，落丁本
はお取替えい
たします。

# 伊藤整全集 第13巻 目次

# 新心理主義文学


自己の辯（序にかえて）　一〇
〈第一部〉
文学について　一四
新心理主義文学　二三
小説の心理性について　三〇
方法としての「意識の流れ」　三六
文学技術の速度と緻密度　四二
文学領域の移動　四五
文学に於ける技術の方向　五〇
小説に於ける実験　五三
〈第二部〉
プルウストとジョイスの文学方法　五六
について　六六
"WORK IN PROGRESS"について　六七
フランスから見たイギリスの現代小説　六九
ポオル・ヴァレリイとエドガア・ポオ　七三
ジョイスのプロットの扱方　七八
〈第三部〉
新しい小説と精神の領域　八三
心理小説に関する覚書　八五
心理的現実について　八七
現実と表現との接近　九〇
今日の文学と新感覚派運動　九三
小説に於ける興味の問題　九六
歴史的なひとつの斜面　九八


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

職業の秘密　九九
赤と黒　一〇一
海上にて　一〇四

## 評　論（昭和5年～同11年）

〈昭和5年〉
芸術価値論　一一〇
英米篇について　一一一
ジェイムズ・ジョイスのメトオド
「意識の流れ」に就いて　一一三
机上にある制作に就て　一一七
方法追求の文学と適用文学　一二〇
コクトオに摂取される芸術　一二三
〈昭和6年〉
少数のための多数　一二六
『主知的文学論』へのエスティメイション　一二八
リアリズムとしての文学　一三〇
新心理小説は如何にして可能か　一三二
新心理小説　一三五
シンクレア・ルイス覚え書　一三七
三つの著書　一三九
マックス・ジャコブの「詩法」　一四一
プランタン号の航海　一四三
数冊の書物についての断片　一四四
〈昭和7年〉
『追いつめられる男』　一四五

『詩のための詩』他　一四七
「ユリシイズ」の作者　一四八
ヴァジニア・ウルフの抒情感　一五〇
The Strange Necessity　一五二
佐藤春夫氏『魔女』　一五九
ジョイスの一側面　一六一
今日の小説と詩　一六三
ジョイスの『室楽』　一六七
冬夜の二書　一六七
書物と人　一六九
『ジョイスの文学』　一七二
文学の思考とモラリティ　一七四
芸術の生理的考察　一八四
現代文学の芸術的方向　一八九
伝統の正体　二〇一
日本文学の特殊型と外国文学　二〇三

〈昭和8年〉

『マルドロオルの歌』の著者　二〇六
創作における意識　二〇八
ツルゲェネフ散文詩　二一二
明治に於ける心理小説の発達　二一三
新しい文章への考察　二二三
日本文の問題　二三五
井伏鱒二氏『随筆』　二三七
二十世紀文学　二三七
平衡を求めぬ精神　二三九
「文学評論」に就て　二四一
「危機に於ける人間の立場」を読む　二四二
『スタイン抄』と『一片詩集』　二四三
新心理主義運動前後　二四四
翻訳の研究　二五三

芸術の野蛮さ　二五九
文学論三冊　二六一
『モンマルトル・カルティエラタン』　二六四
一九三四年になっても　二六五
〈昭和9年〉
ロレンスの価値　二六七
ヴァジニア・ウルフ　二六八
長篇小説雑感　二七三
小説に見る伝統の問題　二七七
小説に就ての断片　二八二
作家と私生活　二八四
文芸時評　二八九
〈昭和10年〉
ルソオ的な幻覚　二九六
作家の問題　三〇五
ドストエフスキイとジイドへの触れ方　三一一
文芸時評　三一四
小説論　三三〇
三月の作品　三五一
野性の問題　三五六
心境型と戯作型　三六一
小説思考の頽廃　三六五
文芸時評　三六八
表現と個性　三七一
倫理と個我　三七八
分担月評　三八三
偶然文学論について　三八五
モラルについて　三八六
文壇的批評と非文壇的批評　三八八

文芸時評　三九一
児童の綴方作品　三九八
翻訳余談　四〇九
『竹藪の家』　四一一
芸性と性　四一三
「チャタレイ夫人の恋人」に就て　四一七
方法としての文学　四二〇
集団と個人の芸術　四二三

〈昭和11年〉

文章の新研究　四二五
父祖の血　四六二
小説に於ける性の倫理　四六六
ロレンスの文学観　四七三
一九三五年の世界文学　四七八
翻訳界の業績　四八一
翻訳やつれ　四八四
ロレンスに於ける芸術と人間　四八六
性とモラル　四八八

〈追補〉

モルナアルの秘密　四九一
古典思潮への一瞥　四九二

# 伊藤整全集 第13巻（評論）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

# 新心理主義文学

# 自己の辯　（序にかえて）

一九三〇年五月に発表した僕の小説「感情細胞の断面」に対して川端康成氏が好意ある、そして同時に鋭辣な批評をして下さって以来、僕の書いたエッセイや小説はあらゆる種類の非難と嘲笑と否定と罵言と、また僅少の好意ある忠告とを浴びとおして来た。一体ものを書いて行くということ、意見を発表してゆくということは、こんな物々しい批判に直面しなければならないものなのだろうか。田舎に居てこっそり詩を書きためていた六七年の生活の静けさの中にも文学があったとは考えられぬほどだ。僕がこんなはげしい批判を受けるに至ったのは、僕の試みた制作上のエキスペリメントと、エッセイの上の改革的言辞が原因であったらしい。それ等の試みは僕の制作上の途をきり開くために絶対に必要な努力だ、と一回宛僕を思いこませていたのだ。僕のしたことに含まれていたかも知れぬ過誤に対する批判は兎に角として、僕は自分のしたことを悔いる気持は今いささかも持っていない。そしてまた色々な立場から色々な判断と意見を述べられた諸家、最も基礎的な非難をあびせた畏友瀬沼茂樹をはじめ、室生犀星、小林秀雄、春山行夫、阿部知二、中河与一、阪本越郎、佐々木英夫、原一郎、竜胆寺雄、半谷三郎、北原武夫、竜口直太郎、奥村五十嵐、一戸務、太田咲太郎等の諸氏の言葉、種々の雑誌の批判、卑劣きわまる無記名の嘲罵等はやっと僕一人の力で組みあげた貧弱な建設に加えられるにはあまりに大きな重圧であったとも思われる。第一僕がそれらの議論の目標となるに値したかどうかさえ疑わしいことだ。ただ僕は僕自身に対しても外部の批判に対しても出来るなら公明に、孤高な気持や卑屈な気持になるまいとつとめて来た。それらの批判に対して答える義務があると忠言する友人もある。僕自身も何度かそのことを考えた。だが今になっては第一各々別個な立場にあるそれ等の人々の数だけでも多すぎる。それ等の人々の立場と語法と真意とを判断するだけでも大変な仕事である上に、当然僕は議論のための議論、為にする処あると思惟され勝ちな不愉快な議論を繰返さなければならないことになるだろう。そして好意を持ってくれる人人までもしいることになるかも知れない。それをする間に一歩先へ進むという途を僕はとることにした。およそ今後も何等かの形で加えられるであろうところの批判は甘受す

るほかはないのだ。僕は明るくそれに接するつもりでいる。また僕の仕事がそのために歪められることなからんことをひそかに期している。懇な友があって、君は一つも傑作を書いていない、と言った。そのとおりである。君は技術論ばかりする、と言った。そのとおりである。自他の作品の秘奥にある精神について軽言を玩ぶことを僕はよくしなかったのである。君は古い、その通りである。だからと言って、僕は今迄にしてきた努力をしなかった方が宜いとも、また、もうやめようとも思わない。僕は僕自身の古さと、僕自身の自然発生的感傷と、僕自身の詩的小説傾向を、踏み破り、投げちらし、構成しなおすために戦って来たのだし、また戦ってゆくつもりでいる。僕のこれ等の言も、すでに自らを語って多きに失しているかも知れぬ。だがなお近く眼をとおした書物について二三ふれて、今の自分の気持を明かにしたい。この頃、どんな小説を読んでもちっとも面白くない。人間は驚かされることを喜ぶものらしい。たいてい予想した人が予想したものを書いている事で僕は落胆する。その限界を越えることが必要であり、根本的なことであるらしいのだが、やっぱり自分を棄て去ってから後、新しく得ることの難しさが総ての作家を当惑させているにちがいない。そして観察から、また感受から始めねばならない小説の中に、真の観察を、感受を獲そうとする努力すら、人は安全さのために惜んでいるように思われる。

前進的なるが故に不安定な世界にいても何か確実な核を持てる作家が欠乏しているのではないか。僕が殆んど、総ての小説に退屈しているのはまた確かに「ユリシイズ」*Ulysses* に親しんだことが一因をなしている。「ユリシイズ」は未曾有の破壊だというリベッカ・ウェストやブライアン・ベントンの言葉は今になって強く僕に同感を強いる。あの長い第二部一節二節三節のモノロオグ・アンテリウルがリアリズムに対する徹底的なパロディでないと誰が言い得るか？　全く、その全崩壊の中に立てるジョイスは讃歎さるべきかな、だ。そして難解きわまるサイクロップスの酒場の場面の複音的表現に至っては文学全体への彼の侮蔑に面接する様な気がする。我々が理解することの困難な"*Work in Progress*"は暫く措き、旧文学のあらゆる表現を吹き飛ばしたようなこの作品に接した後では普通の小説は朝夕の挨拶位にしか僕を動かさなくなってしまった。甚だしい不幸だ、と僕は自分で思っている。作品が真面目に書かれてあればあるだけ、噴火のあとに立てた旅行者の天幕のようにしか見えないのだ。僕は仕方がないので、小説への信仰をとり戻すために、読みごたえのありそうな他の種の作品にぶつかって行って見た。始めて読むもの、何度目かに読むものを入れて「スワン家の方」「赤と黒」「背徳者」「法王庁の抜穴」「フリオ・フレニトとその弟子達」「痴人の告白」「知られざる傑作」「夜開く」「狭き門」「横

光利一集」「志賀直哉集」「巴里の憂鬱」等手近にあるものを何でも貪るように読んだ。然してなお自分の内部の生理の渾沌としているのに驚いた。それほどジョイスは僕の以前の秩序を破ってしまっていたのである。告白するところ、これ等を読んでなお、僕に頼る力を感じさせたのは、プルウストとスタンダアルであった。また、ドストエフスキイを読みなおしたいと考えたのは何故だろう。そして最後に堀口氏の訳した「ジャコブの詩法」を読んでやっと少し落附をとり戻した。それが小説でなかったせいもあるだろう。また、それがジャコブのカトリック精神に貫かれていることが、僕をより広範囲な平衡の方へ呼び立てたせいもあるのだろう。あるいはまた、シニカルでそしてオオソドックスな彼の批評精神が、僕に文学の健康な生理を感じさせたのであろう。僕はジョイスの「ユリシイズ」が小説としてそれ自身欠くるところなきものであるとは考えていない。また、人はなお、ある人為的条件のもとに於て「ユリシイズ」の如き作品を書き得るかも知れない。そしてかつてあった文学作品の類型を冷然と押しやれるかも知れない。けれどもスタンダアルのような作品を、プルウストのような仕事を、人が如何なる人為的条件のもとに於ても書き残すことが出来るとは、僕には考えられない。「ユリシイズ」に於ける作者の精神の働きかたは、スタンダアルやプルウストに於ける作者の精神の働きかたと根本的に異っている。これは作品価値の高低ではなく、作品価値の性質上の区別であるが前者にあってはそれが主として作品の様態構築に向けられ、その中の人物は一定の規範に帰納することの出来る、或る「在りやすき」ものであるが、後者の作品では、作者が自己を作品の中央に置くことによって対象との間に発生する、痛烈な精神活動の表現をしていることであると思われる。今僕が小説への信仰のために欲しているものも作者の思惟的観察的能力にほかならない。それは対象をかりた作者彼自身の属性の表現であって、対象の撰択によって生じた価値とは異るべき作家型の価値である。またそれは同時に方法の撰択によって殺されることのない能力だ。それが、今までの文学にあったと同じように僕等の文学に再現されることには何の意味もないと僕は考えている。もし僕等に為すべく許される仕事があるならば、それはジョイスが徹底的に破壊しさった部分部分を避けず、そこを通り、それを築きなおすことによって僕等自身の文学を生むことだ。アンドレ・ジイドの作品は僕には少しも面白くない。僕は、色々な人から、色々な忠告を受けながら、ジイドの邦訳された諸作品「狭き門」「背徳者」「法王庁の抜穴」等を通読した。そのうちで「狭き門」には相当に感心した。だがやっぱり今になっても僕はジイドがそれ程「大きな」作家であるとか「深味のある」作家であるとか「純粋」な作家であるなどと確信出来ずにいる。その罪の大部

分は僕の方にあるらしいことも僕にはわかるのだが。そしてジイドが一番力を入れているような処を僕がぴったりと受けとることが出来ないのから見れば、ジイドの文学に関するかぎり僕の享受能力は根本的な欠陥があるもののようである。それはとにかくとして僕がジイドに対して感じた不満を述べてみる。ジイドが語ろうとするものは、ある存在間のコリジョンであることは察せられる。そのことは宜い。また宗教であり、モラルであることも明かだ。そしてそれ等についての思惟者として彼が卓越した人間であることもうなずかれる。だが彼の提出した思考は文学に依らずとも存しうる種類の、現実を帰納した抽象的思考ではないだろうか。彼の作品はある問題についての一般的思考の一般的提出にすぎない、と思われる。僕はジイドの文体について知る所はない。だが彼の現実への接しかたは彼の意図した抽象論の達成にのみ専心して、我々の眼をうち、耳をうち、神経に殺到し、意志や感情に肉薄する直接性を喪失するようなものだ。彼の現実はある抽象された現実にすぎない。それもまた文学であるが故に宜しとすることも出来よう。だが彼には根本的に現実の「特殊」な観方、思考者としてでなく感受者としての特異性というものがない。かかる種類の作家は僕には退屈きわまるものだ。文学上の思惟というものは、僕は彼の行っているような抽象的なものではあるまいと考えている。それは現実の感受からのより直接な思考、推理、判断であるべきだ。ジイドの存在がこんな非難でゆるぐようなことは在り得ないだろうし、識者は僕の意見をとるに足らぬものとするかもしれぬ。だが、はっきりと理解できる時まで、僕はジイドに対する僕のこの考を棄てないつもりだ。その他、志賀直哉について横光利一について感じたことも、今性急な断言をなすに危険な気持もあるから別な機会をまつ。

# 第一部

## 文学について

### 文学に於ける新

新感覚派の運動以来、自らあまり深く意識することなくして、新しき表現形式を追った文壇の前衛的諸作家は、多彩なフランス文学の急進的作家の影響下に多く在ったと言わねばなるまい。そして、エミイル・ブウヴィエ Emile Bouvier がフランスの新しき文学を定義して、余りに重視されたる伝統的な智性に対する「一種の反抗であり、今まで馴致されていた、より劣れるエネルギイの解放、想像的自由の放免である」「*Initiation à la Littérature d'aujourd'hui*」と言ったのは、最近の日本のアヴァンガルド的な諸作家にもそのまま当嵌る言葉でないだろうか。例を挙げて言うならば新感覚派系統の文学的方法を久しい間、執拗に支配していた、非理論的、反現象的な、矛盾せる描出方法のいくつかを同時に交錯させることによって積極的に明確度を破壊した表現は、殆んどその反理智的な点のみによって、「新しい」と言う観念を我々に与え、また作家自らに対しても「新しい手法」を持っているという自負を与えていた。また、その次の時代に起った新しい「ブルジョア」作家群のある人々は、表現の反理智性をある程度まで棄て去ると共に、素材の反理智性を帯びた作品を発表した。この時期の作家のなしたことは、一面に於て、理智性に対する反抗という形式での文学の「新しさ」への否定であったとともに、反動として、読者の意識的な重要視ということであった。それ故そこに使用された素材上の反理智性ということも、それ以前の新感覚派文学が「新しさ」のために破壊を行ったのとは違って、プロレタリア文学に対抗しての実質的な読者確保の必要から出発していた、と見なければならないであろう。然しながら、読者の要求するもの、読者大衆を確保するものという意志のもとに制作された諸作品が、その所有した実際的な任務、換言すれば、文学の功利性を利用した任務を果した反面に、文学の新鮮な技術の建設に於ては、やや不満足であったということは、公平に指摘されねばならないものであると思う。正確に言うならば、文学に於ける新しさ、とは何であるかと言うことに就て、文壇人に明確な概念が持たれていないのではあるまいか。これは新しい、と言う。そして今日の文学に於いて



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.